

「神の栄光を見る」

イザヤ書
ヨハネによる福音書

第60章 1節～3節
第11章 38節～44節

説教 岡村 恒牧師

「もし信じるなら神の栄光を見る…」(40節)。主イエス・キリストは《ラザロの復活》という奇跡を行われる前に、マルタに言われました。

愛する兄弟ラザロが死にかけている、とマルタは主イエスを呼びに使いを送りました。本当なら、大急ぎで駆けつけるはずですが、ところが主イエスは、「この病気は死ぬほどのものではない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである」。(ヨハネによる福音書 11章4節)と言われ、すぐには出かけませんでした。人間が見る現実と、主イエスをご覧になる真実との間には大きな違いがありました。絶望的な現実を前にしても、主イエスは、愛する者の死が、神の計画の中にある特別な出来事だと言われるのです。

危篤の知らせから2日たってから、主イエスは、「わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行く」。(// 11章11節)と言われて出かけられました。実際には、ラザロはもう死んでしまっています。家族たちの祈りにもかかわらず、死んで葬られています。ベタニヤに行っても悲しみしかないので。しかし主は、ラザロの死が「あなたがたのために」良いことだと言われて歩まれました。

マルタが主イエスを迎えに出ると、主はこう言われました。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。(// 11章25節、26節)この言葉は、大阪教会で葬儀が行われる時、冒頭の〈序詞〉で私がいつも朗読する御言葉です。

この場所に居合わせた者の誰も、目の前で死人の復活が起こるなどと想像さえできないでいました。主イエスは悲しむマリヤや人々の姿を見て、「激しく感動し、また心を騒がせ」(33節)られました。死の現実の前で絶望する人間を前に、はらわたが激しく揺さぶられ、涙を流されました。主イエスは、「罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われた」(ヘブル人への手紙 4章15節)お方です。私たちの悲しみの全てをご存知です。

ラザロの墓での出来事は、そのまま、やがて主イエスの墓が空にされる日の出来事を指し示します。岩に掘られた墓には石がはめてありました。死人は布で巻かれ、墓に横たえられ、も

う既に4日もたっています。この墓の前で、主イエスは目を天に向けて感謝の祈りを捧げ、そして大声で言われたのです。「ラザロよ、出てきなさい」(43節)ラザロは、死人のまま墓から出て来たものではありません。生きている者として墓を空にしました。神の力が、死に負けることがなく、死人を死の眠りから引き上げられることが、はっきりと示されました。ここで、神の力、神の栄光がどれほどのものかが明らかにされました。死でさえも、私たちを主イエス・キリストから引き離すことなど出来ないのだ、ということが示されたのです。

これを見た多くの人々が、主イエスを信じるようになりました。何も語らずに主の傍らに立つラザロを見て信じたのです。しかし目で見える信仰が本当の信仰ではないこともやがて明らかになります。主イエスを救い主としてエルサレムに迎えた人々は、すぐに主を十字架に架けてしまいました。弟子たちも十字架を前にして皆逃げ去ってしまいました。主イエスご自身が墓を空にし、神の御元に引き上げられ、ご自身の霊を愛する者たちに注ぎ入れて下さって初めて、弟子たち、そして私たちは真実を目にし、神の栄光を見るようになったのです。

主イエスは、「神の栄光を見る」と宣言して、神の力がどのようなものか、どれほど確かか、何があっても微動だにしないものか、この日、お見せになりました。地上の栄光とは比べものにならない、私たちの想像を超えた神の力を、私たちはやがて見ることになります。この身と魂の全体をもって味わうことになります。

新しい天と地がやって来る時、あのラザロのように私たちもまた、主によって名前を呼ばれて引き上げられ、神の前に立つことになります。主イエス・キリストを救い主と信じ、神の力によって永遠の命を持つ者として生かされることを信じる者たちが皆、確かに〈神の栄光〉を見ることになります。

洗礼を受けて新しく生き始めた者は、ラザロが復活の後に主イエスと食事を共にしたように、地上で聖餐の食卓を囲んで歩みます。主が再び来て、私たちの名前を呼んで下さるその日を、共に心待ちにして歩みます。死を目の前にした日々でさえ〈祭りの前夜〉であることを確信して、希望を持って歩むのです。

(記 岡村 恒)